

# 明治初年における鹿児島藩の軍学教育

――彦根藩留学生から見た実態について――

瀬戸口 龍一  
(大学史資料課)

はじめに

本稿は明治初年に鹿児島藩領内において、全国から諸藩士を集めて行われた軍学教育の実態およびその意義について考察することを目的とする。専修大学創立者の一人である相馬永胤は明治三年（一八七〇）、彦根藩より留学生として選ばれて鹿児島藩へ向かうが、その時の様子を自身が書き残した「相馬永胤翁懷旧記」に、次のように書き残している。

此頃各藩中最モ重ヲ為スモノハ薩摩藩ニテ、当時西郷隆盛モ薩摩ニ在リタレハ、天下ノ大勢ハ薩摩ニ依リ決スルノ有様ナリシ為メ、余ハ彦根藩ノ命ニ従ヒ、留学生トシテ同地ニ行キ、同藩ノ状況ヲ觀察スルコト、トナリ、同地ヘ赴キタリ。同地ニ在テハ兵学校ニ寄宿シ、時々今藤先生ノ塾ニ通ヒ、先生ノ講義ヲ聞キ、折節、西郷隆盛、桐野利秋、榎原繁、中井弘、伊知地正治、其他知名ノ士ヲ訪ヒ、時ニ関シ意見ヲ尋ネ、又、一方ニハ諸藩ヨリ同地ニ入込居タル諸士ト往来シ、共ニ時事ヲ談論セリ。同地滞在中熊本、佐賀、小城地方ヲ遊歴シテ、其他ノ名士ヲ訪問

シ、時ニハ大ニ時事ニ付闢論セシコトアリ。同地ニ在ルコト数月ニシテ、更ニ彦根藩ヨリ欧米視察ノ命ヲ受ケタリ。一

相馬永胤が鹿児島藩に滞在した期間はほんの数ヶ月に過ぎないが、ここからはいくつかの点が指摘できる。相馬は藩から命じられて鹿児島藩に留学し、鹿児島藩の状況を観察する役目を担っていたこと、この時期、相馬を派遣した彦根藩のように、諸藩も藩士を鹿児島藩に留学させていたことなどである。また、西郷や奈良原（榎原）、伊地知といった当時の鹿児島藩の名だたる重臣たちが諸藩からやって来た留学生たちと交流していたこともここから知ることができる。では、この時期に全国から鹿児島藩に集まった諸藩士たちは鹿児島藩の地において何を行っていたのだろうか。残念ながら「相馬永胤翁懷旧記」には滞在中の具体的な様子は書かれていない。

これを補う史料として、今回取り上げるのが滋賀県彦根市立図書館に所蔵されている「手控」<sup>2</sup>という史料である。本学は今年、創立一三〇年を迎える。大学史資料課は今年九月に刊行予定の『専修大学史』編集作業の一環として、昨年から創立者を含めた本学に



「手控」表紙（彦根市立図書館所蔵）

関わる資料収集を積極的に行っているが、この史料は相馬永胤に関する資料調査を出身地である彦根市において行った際に市立図書館の目録に所載されていたものである。

「手控」について書誌情報も含めて簡単に触れておくと、体裁は横半帳一冊、三十四丁、大きさは十六センチ×八センチ

チとなっている。目録によると作者は樋口一蔵とある。樋口一蔵は彦根藩士。明治四年（一八七二）調の「彦根藩士戸籍簿」という史料に「樋口市蔵」の名前を見ることができるといふ。彦根城博物館学芸員・野田氏によると樋口は「屋敷無之士族」または「一代切在勤中士族」であり、居住地は「十三丁目之内」、実名は「忠氏」とのことであった。「十三丁目」は現在の彦根市芹橋十三丁目を指し、当時、足軽が多く住んでいた場所であったそうである。樋口家は慶長十五年（一六一〇）以来、代々井伊家に仕え、市蔵で八代目、源氏姓を持つ家ということであった。

つまり、「手控」は、明治三年二月一日に彦根を出発して鹿児島に滞在した彦根藩士・樋口一蔵の記録であり、鹿児島における具体的な行動内容のほか、各地から集まった藩士たちの名前も見ること

ができる史料ということが出来る。その冒頭には「鹿児島藩江軍事為修行差越候様被仰付、二月朔日、彦根表出発ス」とあり、樋口は「軍事修行」のために鹿児島藩へ留学したことが明確に記されている。「手控」には相馬永胤の名前も書かれており、鹿児島での彼の動向の一端もこの史料からうかがうことができる。相馬も「軍事修行」のために鹿児島藩へ留学したと考えて良いだろう。

以下、本稿ではこの史料を中心にして留学生たちの鹿児島での具体的な行動を見ていくこととするが、最初に幕末における鹿児島藩の軍制改革および教育改革を見ていく。「手控」にあるように諸藩士が「軍事修行」のために鹿児島藩に留学したのであれば、明治初年の鹿児島藩において、諸藩士に軍学を教授できるような体制がつころ、どのようにしてつくられていったのか考えるためである。なお、史料名を明記していないものはすべてこの「手控」から取ったものであることを最初にお断りしておく。

### 1. 幕末における鹿児島藩の軍制改革の状況

幕末の幕府および諸藩における教育改革および軍制改革の一つとして兵学校や軍艦所の設置が挙げられる。従来、武術教育の場としては各藩が武術稽古場を領内や江戸藩邸に置き、藩士に剣術・槍術・弓術などを奨励してきた。この状況を一変させたのが寛政期以降多発する異国船の到来による海防意識の高まりであり、開国後の内憂外患意識である。諸藩は大砲や小銃、弾薬などの製造や買い入れを

行い、これを用いた洋式の軍隊編成を行った。さらには大船を建造購入した藩においては航海術や測量術などを学ぶ必要に迫られ、そのための教育部署が設けられた。このように幕府や諸藩は外圧に対抗するため急いで海陸軍を整備していったのである。

これにあわせて軍制の改革を行う藩も出てきた。農兵、商兵を採用し、大砲隊や狙撃隊などを組み込むなど大きな再編を行った長州藩、長崎警備体制の強化や領地の海岸防備のために家臣団を増強し、銃隊を設置した佐賀藩や平戸藩など、数多くの例を挙げることができる。

それでは鹿児島藩はどうだったであろうか。鹿児島藩において軍制改革が行われたのは弘化三年（一八四六）〜嘉永元年（一八四八）にかけてのことである。洋式火器類が導入されたことにより洋式銃隊が編成された。海岸防備のための砲台の築造、鉄砲・火薬などの製造が行われたのもこの時期のことである。

これらを可能にした要因の一つとして十一代藩主・島津斉彬の主導によって積極的に行われた産業政策や教育政策を挙げることができる。鉄製品を製造するための反射炉の建設などは斉彬の業績としてよく取り上げられている事例である。反射炉の周辺にガラス、陶器、磁器の工場や蒸気機関の製造工場をつくり、これらの事業を行う工場群を集成館と名づけた。これによって鹿児島藩においては国産の大砲製造が可能となった。また斉彬は造船事業にも力を入れ、洋式軍艦の製造にも成功している。このように鹿児島藩が他藩に先

駆け、洋式軍備を導入していった背景には斉彬の先見の明が大きい。それは鹿児島藩の地理的要因や琉球との関係が挙げられるが、本稿ではその意義を求めることはせず、明治初年の軍学教育に繋がる下地が幕末のこの時期に出来あがっていたことを確認しておくに止めることとする。

鹿児島藩の幕末の教育政策に目を向けると、開成所の設立が挙げられる。鹿児島藩が藩士に対して洋式軍学やその技術を専門的に教育する機関である開成所を設けたのは元治元年（一八六四）六月のことである。それに先立つ同年五月、幕府は海軍操練所を神戸に設置し、生徒の募集を行った。左に挙げる史料は幕府の海軍操練所の達書と鹿児島藩の開成所の設置達書である。

#### ①海軍操練所設置達書

今度海軍術大に被為興、撰津神戸村へ操練所御取建に相成候に付、京阪・奈良・堺・伏見に住居の御旗本・御家人子弟厄介は勿論、四国・九州・中国迄諸家々来に至る迄、有志の者は罷出修業いたし、尤業前熟達の者は御雇、又は出役等にも可被仰付候間、委細の義は勝安房守可被承合候

#### ②開成所設置達書

一開成所

右別段の思召を以被召建候付、当分蒸汽方右の通名目に相替候、左候て右の通学子局被相居候

海軍礮術    海軍操練    海軍兵法    陸軍礮術    陸軍操練

陸軍兵法 築城

右一科

天文 地理 数学 測量 航海

右一科

器械 造船

右一科

物理 分析

右一科

医学

右一科

右の通被召建立候、全体当時世におひては、海陸軍事、測量器械等の学、開明いたし武備十分相調、攻守の権我に帰候様御盛業被為在御趣意に候、依之石川確太郎、八木綱平へ授教方被仰付候間、人物吟味の上、其材に応し御扶持米被成下、入学可被仰付候

子六月

龍衛。

①にあるように神戸に開設された海軍操練所は京阪周辺の旗本や御家人、西国諸藩士に募集をかけている。鹿児島藩から入所した者もいたようである。次の②によると、開成所は従来の蒸汽方の名前を替えたもので、場所も蒸汽方と同じであった。つまり、それ以前から鹿児島藩はこのような学問や技術の教育を行っていたが、今回さらにそれを発展させて開成所として独立させたのであろう。こ

こでは、学科としては五科目を置き、兵法や砲術、天文、造船、さらには医学を藩士に学ばせるための学校であったことがわかる。このようにほぼ同時期に幕府も鹿児島藩も技術訓練および軍学教育を始めていることがわかる。この時期、鹿児島藩士たちは海軍操練所と開成所の両校で洋式軍学や航海術などを学んでいた。なお、開成所には教授十名、助教十名、訓導師八名、句読師六名がおり、中浜万次郎もここで英語を教えていた。差出人の「龍衛」とは家老・龍衛久齡のことである。

このような学校の設置は当然のことながら開国後の海防への危機意識によるものであり、幕府や鹿児島藩のみならず、多くの藩でも同様の意識のもと藩士教育が行われていた。

海防への意識から特に重要視されたのが操船術と大砲の取扱いであった。四方を海に囲まれた日本にとってこの二つの技術は外敵から身を守る際、非常に重要な技術であったことは言うまでもない。そのため、開成所においても開設二ヶ月後の八月には次のような達書が出されている。

開成所

砲術方

右書籍方被廢候付、開成所の内へ右の一局被召建、砲術取調者勿論、大砲野戦砲打方教授口導、且台場打方砲術訓練等の節は、繰廻致出役、万端教授方へ申談、原書比較の精巧の術相開き、弥練熟の功業相遂候様被仰付候條、可申渡候

但、砲術方係の儀は、書籍方掛へ被成下候御心附金、是迄の通被成下候<sup>7</sup>

この史料からは、鹿児島藩は開成所にあった書籍方を廃して砲術方という部局を置き、野戦における大砲の打ち方や台場からの大砲の打ち方など実戦を想定した教育が行われ始めたことを知ることができる。

さらに開成所では軍学や操船を学ぶために他国に修業したいと願う者も一度開成所に入所させ、最低限の稽古を付けた上で、江戸や長崎へ留学させることを定めている。この開成所入所後、外へ修業に出るというシステムを本学創立者の一人田尻稻次郎を例に挙げてみる。

田尻稻次郎は嘉永三年（一八五〇）、京都高倉錦小路（現京都市下京区四条通高倉）にあった鹿児島藩邸で生まれた。田尻は海軍に入るために慶応二年（一八六六）、十六才で開成所英語科に入所して、英語を学んだ。その伝記によると「鹿児島開成所の制たる、二級生となるや志望により、長崎、若しくは江戸に遊学せしむる定めなり。先生二級生に進むや直に長崎に遊ぶ。」とある。開成所に二級生になると志望する者は江戸や長崎に遊学できる制度があったかどうかは史料上では確認できなかったが、実際に田尻は開成所から長崎に半年間留学し、その後、江戸に出て慶應義塾に入塾、その後は幕府の開成所や海軍兵学寮で学んでいる。このように鹿児島藩の開成所は藩士の人材育成システムとして非常に大きな役割を果たし

ていたことがわかる。

話を元に戻すと、開成所はもともと海軍および陸軍の兵法を研究する場として、そのために地理・数学・測量・造船などを教授していたが、その際に必要となるのが外国語の修業であった。そのため入学生にはオランダ語と英語をまず学ぶことを義務づけたのである。しかしながら、語学教育には時間がかかるため、専門教育に入ることができず、鹿児島藩は内憂外患の状況を鑑みて、慶応二年、海軍の教育機関として海軍所を、陸軍の教育機関として陸軍操練所を設け、実戦教育を中心とした訓練を行った。これによって開成所は英語や数学などの教育を中心とした基礎教育機関となったという。

その後、この英語などの基礎教育は開成所で、軍学および訓練は陸軍操練所・海軍所が行うという体制がつけられ、この体制が明治初年まで続いていた。

## 2. 鶴岡藩士たちの鹿児島藩留学

これまで、明治初年において鹿児島藩が他藩の藩士を領内に受け入れ、彼等に対して軍学教育を施したという事例で取り上げられてきた唯一の事例が鶴岡藩士<sup>10</sup>の鹿児島藩留学であろう。『鹿児島県史』にも「藩の兵制改革の実挙るや、諸藩より見学に来る者も多かった」と記しているが、その実例として挙げているのは鶴岡藩の事例のみである。

鶴岡藩士の鹿児島藩への留学の様子について、岩波文庫の『西郷

『南洲遺訓』の書後の辞には次のように記されている。

一、遺訓の由来は、明治三年荘内侯の公子酒井忠篤、忠実(マヤ)を初め、藩士菅実秀・三矢藤太郎・石川静正等数十人来て薩に寓し、屡々翁に就いて教を乞ふ。已に帰り、其聞く所を纂めて一書となし、之を同士に頒ちしに起る。明治二十三年三矢藤太郎之を荘内に印行し、「南洲翁遺訓」と題す、是れ遺訓印行の始か。二十九年佐賀の人片淵琢再び之を東京にて板行し、「西郷南洲先生遺訓」と題す。爾來有志者往々之を伝写し刷印して珍惜愛誦せり。<sup>12</sup>

ここにあるように旧鶴岡藩主・酒井忠篤、弟の忠宝のほか、藩士・菅実秀や三矢藤太郎など、藩が選抜した藩士七十余名を率いて鹿児島へ向かったのは鳥海氏によると、明治三年十一月のことである。忠篤はこの時十八才。藩士と寝食を共にし、銃器訓練を受けたという。鹿児島滞在中は西郷のほか、鹿児島藩の大隊長・野津鎮雄、桐野利秋、篠原国幹などの号令のもと、練兵に従事したと言われる。<sup>13</sup>しかしながら、鶴岡藩士の鹿児島藩への留学開始時期については、西郷が明治三年五月七日に大久保利通へ宛てた書簡には「近來は君侯方や、外国人や、御客通しにて賑々数様子に御座候。只名計りは高くて、其の実はこれなく汗顔の仕合に御座候。」とあるが、この書簡の解説<sup>14</sup>によると君侯とは鶴岡藩主・酒井忠篤を指し、この時期、庄内藩士や外国人など客が多く賑やかであると大久保に報告しているという。とするならば、先の鳥海氏という明治三年十一月

よりももっと早い時期に庄内藩士たちが鹿児島に来ていたことになるだろう。

また、明治三年十二月五日付の松崎九兵衛に宛てた西郷の書簡には「大泉県の人参り居り候処、是非狩に列れ行き呉れ候様との事にて、今日より内の浦辺迄参り候に付き、抛なく此の如き次第に御座候間、何とぞ御海容下さるべく候」とある。解説によると西郷が鶴岡藩の人々を練兵などで苦勞しているのを慰めるために内之浦大隅山へ狩へ連れていったのだろうとしている。ただし、この解説にも鶴岡藩の人々は明治三年十一月七日に鹿児島へ着き、翌四年三月に鹿児島を引き上げたとある。さらに、この時期に鶴岡の人々が鹿児島を發つた理由として、西郷が明治四年（一八七一）三月下旬に薩摩置県に備えるために常備兵四大隊を率いて上京したのに合わせたためだろうと推測している。

他にも、鶴岡藩士の鹿児島滞在日程については山田氏が明治三年十一月七日より翌四年三月二十三日の五ヶ月間であったと述べている<sup>17</sup>が、その根拠となる史料を挙げていないので、よくわからない。次に鶴岡藩士の帰郷時期に関して、明治四年十月五日に黒田清隆に宛てた西郷の手紙を次に挙げる。

御安康恐賀奉り候。陳れば、大泉県菅並びに酒井等の両三輩、此の十日方帰郷の由に御座候間、明日は深川佐賀町い東八兵衛と申す所へ錢別相企て置き候間、何卒御氣張り下され間敷や。先方へは十字頃より参り呉れ候様申し置き候に付き、少しは前

以て参り居りたく御座候に付き、此の邸へ御出懸け下されたく、左候わば、御同道仕るべく候間、少々の儀は差して御出掛け下されたく、遮って御誘引申し上げ候。誰も亭主振もこれなく込り入り申し候。此方にては、橋口氏並びに十院氏・田中氏三人のみに御座候間、何卒御願ひ申し上げ候。頓首。

(明治四) 十月五日

#### 西郷吉之助

黒田了介様<sup>18</sup>

ここでは「大泉皇宮」つまり鶴岡藩士・菅実秀と酒井忠篤の近習・酒井了恒が鶴岡に居るので、深川の伊東八兵衛宅で送別会を開くので黒田にも参加して欲しいと述べている。鹿児島藩側の出席者は西郷のほか、橋口与一郎、伊集院兼寛の名前が挙がっている。この時期にはもう鶴岡藩の人々は鹿児島を出発しており、軍学修業を終えた後も西郷らと親交があったことがわかる。

このような鹿児島での軍学修業の主旨について、当事者である菅実秀が鹿児島に留学する「某」に話した内容として次の史料を挙げ

某氏の筆記に曰く、明治三年の秋、練兵実習の爲め出京を命ぜられ、一行二十人と共に東京に至り、菅氏に面謁せり。此の時中君<sup>忠篤</sup>兵学実習として旧藩士二十人を率ゐ、既に鹿児島に赴かれし後なれば、一行皆羨しきことに思ふ。余因て菅氏に同行者の希望を陳べ、是非とも鹿児島に往くことを乞ひしに、菅氏

は嚴厲なる容姿にて、一昨年<sup>戊辰</sup>の御謝罪は、辱を天下に曝すと云ふものなり、聞くが如くば、国に居る人々、誰一人如何にして此の辱を雪ぐべきかと、血眼になり心を砕き居る者を聞かず、誠に歎かはしき限りならずや。中君の御奮発は驚き入りのものにて、従来の御大名氣習を悉皆脱却せられ、先発の二十人も負けず劣らずの大勉強、彼れならばいづくに出でても恥かしからず。国辱を雪ぐとは、天下を覆し幕府を再興するとの事にあらず、人々志を立て道を学び皇国の爲め身命を抛ち、連れ武士の手本、天下の模範とならば、是れをこそ辱を雪ぐりと云ふものなれ。是非天下の模範たらんと志を立つるには、君父の仇を持ちたる如く、寝ても寤めても、片時も心に離れぬ程ならではならぬなりと。其の後十一月に至り、許可を得て鹿児島に渡り、翌年三月まで練兵を習ひ、四月東京に帰り、菅氏に面会せしに、薩州の諸先生も一同を能く勉強せしとて非常に称賛せるを聞けり。余も大に満足せりと称詞を受けたり。(下略)<sup>19</sup>

この史料によると、「某」が軍学修業を命じられたのは明治三年秋のことであり、この時には旧藩主・忠篤は藩士二十人を引き連れて先乗りしていることがわかる。「某」はその後、十一月に許可を得て、翌年三月まで修業し、四月には東京に帰ってきたことがわかる。つまり、鶴岡藩士の最初の一行が鹿児島へ行ったのは秋以前であり、修業を終えて帰ってきたのは四月であった。また鶴岡藩士は

全員が一緒に行って、一緒に帰ってきたわけではなかったことも、ここから読みとることができるだろう。

そして、藩主を含めた多くの人々が鹿児島へ向かった理由としては道を学び、皇国のために身命をなげうって、武士の手下として天下の模範となるためとある。

鶴岡藩の鹿児島遊学の目的については大砲練習生として三名、火薬製造研究生として三名を連れていっていることから砲術や火薬の製造術を学ぶことになったと考えてよいだろう。その他、興味深い目的としては楽隊練習生として三名を動向させている点が挙げられるが、近代的な軍隊のあり方を取り入れることもその目的であったと思われる。特に鶴岡藩の支藩である松山藩からは遊学した十六名は小隊長や分隊長、兵士などが選ばれている<sup>20</sup>。

鶴岡藩の鹿児島留学については、これまで戊辰戦争において鶴岡藩が降伏した際に、鹿児島藩の黒田清隆や西郷隆盛が寛大な処置を施し、この処置に対して鶴岡藩が感激し、その後、藩士を鹿児島藩に留学させたというように述べられてきた。また、先に挙げた『鹿児島県史』にあるように、当時、他藩より優れていると考えられていた鹿児島藩の洋式軍隊を学ぶべく鶴岡藩は藩主をはじめとした大勢の藩士を鹿児島へ送り込んだというようにも捉えられてきた。ただし、この時期に鶴岡藩士以外に他藩の藩士がいたかどうかについては、これまで言及されてこなかった。また、留学中の実際の様子も藩主が藩士と一緒にたって修業したと紹介する程度で、詳しい

内容が検討されたこともなかったことをここでは指摘しておく。

### 3. 「南遊日記」にみる桑名藩士の鹿児島留学

明治三年から四年にかけて行われた鹿児島藩への留学については「相馬永胤翁懷旧記」「手控」のほか、桑名藩士・水野勝毅という人物が残した「南遊日記」にも記されている。この日記は『桑名藩士瀧安良記念帳』という書籍に収録されたもので、この本によると瀧安良は嘉永六年（一八五三）十一月二十三日に桑名に生まれ、明治三年十二月に藩命により馬場正武、水野勝毅、高松範重とともに鹿児島に遊学し、翌四年三月に桑名にもどり、同年五月、桑名藩の大参事・酒井孫八郎へ建白書を提出後、江戸藩邸において自決した人物である<sup>21</sup>。

水野勝毅は瀧安良の再従兄にあたる人物で「南遊日記」は、水野が明治三年十二月二十五日に桑名を出発して翌四年三月十三日に鹿児島を発ち、大阪に着くまでの日記である。留学中の修業内容についてはほとんど触れていないが、『桑名藩士瀧安良記念帳』の編集・発行人である町田成男はこの四名の鹿児島遊学については次のように書き記している。

当時鹿児島へハ各藩ヨリ留学生ヲ依頼シ、荘内ノ如キハ数十人ヲ派遣シ居リタルコトハ此日記ニモ明カデアツテ、其士氣ノ旺盛ニシテ之ニ伴フ諸般物質的進歩ニ対シテハ、安良等ハ一見シタダケデ成程ト合点シタ事モ多カルベク、其上諸名士ノ意見ヲ



聞イテハ少壯血氣ノ一同一刻モ猶予スヘキ場合ニアラスト、互ノ見ル所一致シタガ為、滞留僅ニ四十日デ帰藩進言ヲ決シタノデアリ

ここでも「相馬永胤翁懷旧記」にあるように、この時期、各藩から留学生が大勢来ていたことが書かれている。特に鶴岡藩は先に述べたように七十余名という多くの人数を送り込んでおり、おそらくは一番人数が多かったため、印象に残っていたのであろう。また留学生たちの士気は非常に高かったことがわかる。しかしながら収録された「南遊日記」には鶴岡藩士のことは書かれていない。収録されていない部分の日記があり、それを町田が取り上げ、このように書き記したのかも知れない。

この日記によると水野たちの宿泊場所は馬場が「兵学寮」、高松、瀧は「漢学校」、水野は「兵学寮十四番寮」であった。明治四年一月十八日には「山脇氏、(馬場)正武ト共ニ田原先生ニ從テ集成館ニ到ル、製鉄所ヨリ木工織工ニ至ル迄一トシテ備ハラザルナシ」とあるように集成館を案内されて、その設備に圧倒されている。

彼等がここで何を学んでいたかは、一月二十二日に「算学ヲ始ム。十二時ヨリ山脇氏、高松ト田原先生ニ從テ製薬所ニ到ル、我等舍密・砲術ニ暗キヲ以テ恰モ盲人ノ宝ノ山ニ入ルカ如シ」とある。文中にある田原は後で述べるように兵学校総宰・田原陶吉を指すと思われるが、このように来たばかりの水野はまずは基礎学問である「算学」を学んでいる。そして、先に来ていた高松は製薬所において舍密

(化学)や砲術などを学んでいた。

また、この日記から兵学寮の規則についてもほんの少しであるが知ることができる。門限についてである。同じく一月二十二日、先に桑名に帰る山脇の送別会を行い、馬場、高松、水野は寮に九時三十分に帰った。すでに寮の門は閉ざされていたが、たまたま人がいたので入ることができたが、二十五日には田原に呼ばれて「(水野)勝毅・正武兩人ヲ招キ語リテ曰、公等門期ヲ失フ事其情実決シテ遊逸ノ事ニアラス、然レドモ寮法廃スヘカラス、今日ヨリ退寮スヘシ」と言われたという。このように寮の規則は厳しく、これを破るとすぐに退寮になったのである。この件についてはその後許され、再入寮することとなったが、全国から集まった藩士たちをまとめる意味もあり、厳しい寮則を定めていたと思われる。

このような寮則の厳しさについては、明治二年、政府によって設立された大阪兵学寮も同様だったらしく、ある兵学寮生徒が日曜日に外出先から寮に帰ってくる時間が門限から一分遅刻した際、一週間の外出禁止という処罰を受けている<sup>20</sup>。この点から考えると鹿児島藩兵学寮の寮則の厳しさも当時の軍学校としては当然のことであつたのかも知れない。

この日記によると瀧は明治四年三月に桑名藩に帰るが、水野は当地に留まり、軍学修業を続けている。鶴岡藩の面々も先に述べたように、瀧と同様に三月には鹿児島を引き上げたと思われる。水野が鹿児島にいつまでいたかは不明ではあるが、この日記によれば西郷

上京後も軍学教育は引き続き、行われていたものと思われる。

## 5. 「手控」にみる留学生たちの軍学修業の実態

### (1) 留学生たちの鹿児島城下への道のり

前置きが長くなってしまったが、ここからは「手控」より鹿児島へ集まった留学生の実際の様子を見ていくこととする。

「はじめに」で述べたように「手控」は彦根市立図書館の目録によると筆者は樋口一蔵となっているが、実際に「手控」を詳細に見ていくと、筆者が本当に樋口であるかどうかはよくわからない。三月四日の条には「昼後仙波氏、樋口氏等同道<sup>三</sup>而、彼藩邸江参り、脇田市郎へ挨拶致」などとあるように筆者が本当に樋口ならば、自らのことを「樋口氏同道」と書くであろうか。もちろん、この「樋口」は樋口一蔵とは別人という可能性もある。このように疑わしい点が残るが、ここでは目録にしたがって筆者を樋口として話を進めていく。

まず、明治三年二月一日に彦根を出発した樋口の鹿児島までの道のりをたどることとする。朝五時半時に彦根を出発した樋口は、高宮において離別の酒宴を催され、九時半時ごろ、高宮を出発。五時半時ごろに守山に到着し、ここに泊まった。翌三日に守山を出て、山田の渡しを通り、大津に着く。ここで「藩印」を持ってくるのを忘れたため、大久保平治という人物から代わりの藩印を受け取り、出発。伏見で休息を取った後、三日の暁六時に大坂に到着した。

大坂では東城兎幾雄と頻繁に会って鹿児島行きの件について話合っている。また、先に挙げたように樋口氏や仙波氏も同道して、鹿児島藩の大坂藩邸にも出向き、鹿児島藩留守居役・脇田市郎にも挨拶するなど、鹿児島行きの準備を着々と進めている。五日には大坂から鹿児島に向かう手段として鹿児島藩所有の蒸気船に乗り込み、六日明け方に出帆する手はずとなっていたが、不都合があったため、兵庫まで別の船で向かい、天候の良くなった七日に兵庫から蒸気船に乗って鹿児島に向かった。また、兵庫では鹿児島に留学する大聖寺藩士・梶谷克彦、山口均も合流して、この船に同船している。その後、船は淡路島、周防灘、下関などを通り、十七日によく長崎に到着する。この間、下関では鹿児島藩士・奥良三郎、岩切喜次郎らと面会している。

長崎においても、鹿児島藩に留学する多くの藩士と顔合わせをしている。静岡藩士・阿部階、小浜藩士・粕屋熊太郎、佐伯弘平、相馬中村藩・池田参蔵と十八日に面会、翌日には大巡察・有馬藤太、権大巡察・伊庭貞剛など長崎に派遣されている政府役人にも面会している。二十日に長崎を出帆、二十二日夜十二時ごろにようやく鹿児島に到着、彦根を出で二十二日間の旅であった。

この道程を見ていくと、鹿児島藩は蒸気船を提供するなど、留学生たちに対して鹿児島に来るまでの交通の便宜を図っていたことがわかる。また、大坂や長崎などに各地からやって来る留学生たちを集合させ、ある程度、留学生をまとめて鹿児島に送っていたという

こともわかる。とはいえ、無料で鹿児島まで乗せていたわけではないようである。三月四日の条には「船賃之儀ハ船持へ掛合」うように言われたので、直接、鹿児島藩の蒸気船取扱所につとめる「津ノ国屋在久長忠左衛門」へ掛け合ったことが書かれている。

また、毎回鹿児島藩が船を出していたかというところではないようである。桑名藩士・水野勝毅の「南遊日記」では明治三年十二月二十五日に桑名を出発し、二十七日に伏見着。ここから船で大坂へ行き、二十八日に大坂から神戸までは陸路で旅をした。神戸では長崎に向かう船が出航したばかりということもあり、翌年正月五日に、アルゼンチンの飛脚船に乗り長崎へ向かった。この船では鹿児島藩士・安田忠左衛門と同室になり、水野は「大ニ前途ノ便宜ヲ得タリ」と喜んでいる。

この時の船賃が船賃中等二十兩等十両であったことを水野は書き記している。長崎では鹿児島藩邸を訪ねている。その後、長崎から、船で阿久根まで行き、そこから陸路で鹿児島城下に向かった。つまり樋口たちとは違う経路で鹿児島に留學していることがわかる。とはいえ、長崎では鹿児島藩邸へ挨拶に行くなど、行く先々での鹿児島藩への配慮は樋口たちも水野たちも忘れていない。やはり留學先である鹿児島藩の人々との連絡を密にしておく必要があったと思われる。

## (2) 留學生が使用した教科書

では、次に留學生は鹿児島においてどのような軍学修業を行っていたのだろうか。これも「手控」を見ながら話を進めていくこととする。

先に挙げた水野の「南遊日記」では最初に算学を学び、先に留學していた人間は「製薬所」において舎密や砲術に関わる勉強をしていたことを確認した。また、鹿児島藩では幕末の「開成所」において兵法や砲術、天文、造船、医学を学ばせるというシステムをつくっていたことも、もう一度確認しておきぬ。さらに開成所では洋書には英語辞書のほか、算術書、理学書、舎密書などが教科書として使用されていたことがわかっている<sup>38)</sup>。

では、留學生たちが使用した教科書にはどのようなものがあったのかを示す史料として「手控」に載せられた「兵学寮書目」を左に記す。これは鹿児島藩の兵学寮の蔵書目録であり、その値段も併せて記されている。

### 兵学寮書目

- |          |        |
|----------|--------|
| 一、陸軍日典   | 代 壹歩一朱 |
| 一、学寮日典   | 代 金三朱  |
| 一、軍事小典   | 同 貳分二朱 |
| 一、歩兵程式   |        |
| 一、同 生兵之部 | 同 貳歩   |
| 一、同 小隊之部 | 代 同    |

一、同 大隊之部	同 壹匁式分
一、同 衛兵之部	同 壹歩式朱
一、堡障略典	同 金三分式朱
一、陣中軌典	金壹匁
一、金湯中学	同
一、土工程式	壹匁一分
一、教導時限略	金二朱
一、数学問題	金壹分
一、砲術小学	金貳匁
一、洋算例題	金貳歩
定価録	
一、大日本籌海全図	
一、大日本国細図	
一、士官必携一七書	
一、英国議事院伝	

ここでは全ての書籍を詳しく解説することはできないが、いくつかを取り上げ、簡単に説明していくと、『陸軍日典』はフランス陸軍の規則を翻訳したもの、『学寮日典』はフランス陸軍士官学校の内則を翻訳したもの、『歩兵程式』は慶応三年（一八六七）に大鳥圭介が翻訳したフランスの書籍、『陣中軌典』も同じくフランスの歩兵に関する書籍を翻訳したものである。このようにフランス式陸軍に関する書籍が多いことがわかる。これは明治三年十月に政府に

より、海軍はイギリス式、陸軍はフランス式を採用するようにと兵制を規定したことにも関係しているのかも知れない。

教科書について、そのほかに挙げられているのが次の十四種類の書籍である。

規矩射擲表	一冊	雷砲射擲表	一冊
雷銃操法	二冊	重大砲用法	一冊
英国砲軍操法	四冊	砲術小学	四冊
金湯中学	四冊	砲術訓蒙	八冊
野戦要務	一冊	兵家必用	三冊
戦地必用	六冊	兵家須地戦闘術門	六冊
兵家程式	四冊	規矩軍法 教兵家必携	三冊
提綱答古知幾	二十冊	海軍律令	二冊
万国公法	六冊	新條約書	四冊
各国盛衰強弱一覽表	二冊	西洋英條約	二冊
和蘭学制	二冊		

同じように簡単にいくつかの書籍について触れていく。『雷銃操法』は福澤諭吉が翻訳したライフルの扱い方を記した書籍、『野戦要務』も大鳥圭介の手によって翻訳されたオランダの兵書、『兵家須知戦闘術門』は大村益次郎の翻訳による洋式兵法論書であり、ここでは、先ほどのようにフランス書だけでなく、イギリス、オランダといった各国の翻訳書が揃えられていることがわかる。

「士官必携」の籍に ついては『提綱答古知幾』はオランダの戦術書の翻訳書、『海軍律令』はイギリス海軍の規則を翻訳したものである。『新條約書』はイギリス、フランス、オランダ、ベルギーなどの諸外国との開港条文などを集めたもので、当時、士官として知っておかなければならないものが判明できるという点では興味深い書籍群であるといえよう。

### (3) 留学生を教えた鹿児島藩の人たち

次にこの留学生たちの教育に関わった鹿児島藩側の人々について述べていく。明治二年（一八六九）、戊辰戦争に従事した多くの兵士たちが鹿児島に帰還した。彼等は藩主・久光に対して人材登用や門閥の打破など改革を要求し、これに伴いこれまで、下級武士層であった人々は藩政を担うようになり、下級士族、または戊辰戦争において功労のあった人たちが藩の要職につき、藩を動かしていくという状況になった。留学生たちが集まった明治三年から四年という時期は、まさに彼等が台頭していた時期であり、「手控」にも「鹿児島藩官員三等以上」の人名書上が記され、一等・大参事、西郷吉之助を筆頭に、二等・権大参事・桂四郎、伊地知正治、橋口彦次など、続けて伝事、学頭、会計奉行、大隊長、地頭などと役職ごとに名前が記され、この時期の鹿児島藩の職制を知ることができる。

さらに、明治初年の鹿児島藩の学制改革について簡単に述べると、明治元年（一八六八）三月に開成所を造士館内に組み入れ、さらに

和学局を設置した。続けて造士館内の組織を和学・漢学・洋学の三局とし、この体制が明治四年正月まで続いた。明治二年の段階では、三局は知政所直属の部であり、学頭をトップとして、その下に学頭助、都議掾読等の教師がおり、ほかには書師、曆師、通訳なども造士館に所属していたようである<sup>24</sup>。

「手控」には「兵学寮」や「兵学校」という名称が出てくる。兵学寮がどのような機能を果たしていたかについては「当寮（兵学寮）之儀、軍務局寮ト名目被召遣候間、諸藩来着之人数迄、是迄之通ニ而、第一砲術并兵学ヲ目的といたし」とあるように兵学寮の第一義が砲術と兵学とある。この文言は明治四年四月十日に軍務局寮が差し出した順達願の一部であり、兵学寮が「諸藩来着」の人々の受け入れ施設になっていたことがわかる。この兵学寮が兵学校、また、「南遊日記」に出てくる兵学校と同じものなのか、兵学寮は造士館のなかに組み込まれていたのかという問題についてはよくわからない。これらについては今後、鹿児島藩側からの調査が必要となるだろう。

この兵学寮において実際に誰々が何を担当して何を教えたというような記事は「手控」にはないが、三月十二日の条には「第三半大隊出帆相成候事 大隊長種田健次郎引卒」とあるように航海訓練が行われた際の引率者の名前は見ることができる。種田健次郎は種田政明のことで、この時、二番隊長を務めた人物であり、後に陸軍少将にもなっている。このほか航海訓練の引率者には野津鎮雄（後の

陸軍中将)が務めるなど、留学生の航海訓練は当時の鹿児島藩大隊長たちが引率しているようである。

「手控」には鹿児島藩の大隊長として中村半次郎(桐野利秋)、野津七左衛門(野津鎮雄)、種田健次郎(種田政明)、篠原冬一郎(篠原国幹)の名前が記されている。また、兵学校総裁として田原陶吉、伝事衆・上村休介、兵学校大教授・松井安介の名前が記されており、この三人には鹿児島に到着した二月二十三日に樋口は面会している。基本的には兵学校の教師たちが中心となって留学生を教え、実際の訓練には鹿児島藩の大隊長や大砲長たちが指導にあたったと考えられる。

「相馬永胤翁懷旧記」には「時々、今藤先生ノ塾ニ通ヒ、先生の講義ヲ聞キ」とあるが、この今藤の名前も「手控」に見ることができ、「今藤先生」とは漢字者、今藤新左衛門のこと、彼も留学生を教えていたのであろう。

#### (4) 留学生同士の勉強会

では留学生 たちは実際、鹿児島藩においてどのような勉強をしていたかを示すのが次の史料である。

奥氏砲論会読隔リニ相究リ、坂元彦右衛門、但馬仲介会頭ニ而候処、跡代り会頭未タ不相究、翻訳書日頃閑候学生、軍学之事ニ候間、右兩人可罷帰迄会頭可相究迄ニ候間、右砲論第一章より廿章計ヲ究メ、題章可差出候間、最適採用之文一章宛清書被致

候間、三八ノ日兵学寮江一時より持参ニ而、採用之事柄作文ニ從ヒ、尚弁解可致候、尤巨細之義可被相知候ハ、前以兵学寮江出席、訊向聞之也

(明治四) 未四月廿

兵学寮

ここからは、留学生同士が『奥氏砲論』の輪読会を開催していたが、中止となったため、留学生たちが第一章から第二十章までのなかからそれぞれ出題にあった文章を選び、清書したうえで、三と八がつく日に兵学寮に集まって勉強会を開催していたことがわかる。

ここにある『奥氏砲論』とは十二巻七冊からなり、慶応元年(一八六五)に内藤類次郎によって翻訳され、その後の軍学教育によく使用された教科書である。訳者である内藤は、幕末期には幕府陸軍の育成に、明治期には官僚として活躍した大島圭介の門下生であり、蘭学や英学に明るい人物である。

各担当者は次のようになっている。「手控」には「澤氏」というように苗字のみが書かれているため、こちらで藩および名前を補った。

#### 第一章担当者

島原藩・澤省吾、彦根藩・相馬信一郎、姫路藩・久松一馬、姫路藩・伊藤潜蔵、彦根藩・樋口一蔵(または弘前藩・樋口小一郎)

#### 第二章担当者

島原藩・笹田安右衛門、姫路藩・河合猪之吉、姫路藩・池内習

吉、彦根藩・相馬信一郎

### 第三章担当者

堀部（不明）、仙波（彦根藩カ）、柏木（不明）、鹿兒島藩・阿野甚五郎、姫路藩・永田富太郎（または鹿兒島藩 永田研吉、鹿兒島藩・永田彦左衛門）

以上の十二名の名前が挙がっている。このなかで第一章、第二章に名前を見ることが出来る相馬が、本学創立者の一人で、冒頭に紹介した相馬永胤である。これにより彼の修業内容の一端を知ることができるだろう。

では第一章および第二章の出題はどのようなものであったのだろうか、この点についても「手控」には記されている。

### 奥氏砲論卷一作文題

#### 第一章

砲兵の職務ハ大砲及ヒ、小銃自余ノ兵器製造ストあれハ

一大砲ハ錮礮なれは何様の金錮を以、如何して鑄造す之作文

一小銃何様の鉄ヲ以て強て、何様いたして留錐ヲ通シ、螺を

嵌入するの作文

一擲杖製煉の作文

#### 第二章

砲兵の主務之様あり候ハ、云ふニよつて

一野戦ニおゐてハ歩騎の兵隊を援助するの作文

一城塞を攻むる時ハ敵の砲火を何して撲滅するの作文

一城塞を守るニ方つて、敵の野砲台を阻碍し、又砲火ヲ衰弱

せしむる作文

とあるように小銃、つまりライフル銃や大砲の製造法や、それらを戦場においてどのように使用するのが効果的であるかどうかを問う内容の作文が求められていることがわかり、かなり実戦を重要視した出題となっていることがわかる。ここから、当時の留学生たちが何を求めていたかを知ることができる。

とはいえ、先にも述べたように『奥氏砲論』は幕末以来、幕府や諸藩において使用されてきた教科書であり、当時として特別、最新の内容というわけではない。ここでは洋式軍隊において重要な位置を占める小銃および大砲の使用方法を基礎から勉強するために、この『奥氏砲論』が使われたと考えるとよいだろう。

そのほか『奥氏砲論』第五章に書かれている火薬の成分や配合を問う作文も出されている。ここでは長くなるので、火薬成分に関する作文のみを示すこととする。

#### 作文題式火薬成分作文

一、火薬ハ砲術家銃砲必用の要品にして、各は毫モ諸物混セス、常に清潔にて且ツ密未ト成シ、調和其適度ニ及ヒ、年月ヲ経テ、而メ弾得る処ノ速ニ力ヲ甚ク増進ス成分を宜トし、殊に火薬ハ顆粒ニ由ツテ稍速力を区別セリ、如何トナレハ小顆粒ヲ十八听以上の砲に装用シ、放発セシヨリ距離遠カラス、其因ハ則チ

粒は小ナレハ顆中ニ於テ一時ニ火移リ遅クして弾に得処ノ速力増進スルコトヲ減ス、大粒ノ火薬ハ粒は間隙アリテ火を伝フコト一時ニシテ弾に伝達力増進すべく、故に粒の大小に従て勢力を区別スベシ

このような化学知識を要する作文も求められていたことがわかる。「南遊日記」一月二十二日の条にあったように「高松ト田原先生ニ從テ製薬所ニ到ル」という記事はこのような火薬に関する講義があったことを示していたとも考えられる。しかしながら同時「我等舍密・砲術ニ暗キヲ以テ恰モ盲人ノ宝ノ山ニ入ルカ如シ」というような留学生もいたことも事実であろう。そのためにまず算学を教えるというような方法も採られていたのだろう。

#### (5) 鹿児島での留学生たあ生活

「手控」からは残念ながら留学生たちの鹿児島における生活の様子というものを知ることはできない。それは「相馬永胤翁懷旧記」および「南遊日記」も同様である。そこには留学生同士が活発に交流し、西郷や桐野、篠原といった鹿児島藩の重臣たちとも話す機会があったということがわずかながら書かれているだけである。

また、どこに暮らしていたかについては、「南遊日記」から兵学寮、漢学校に寄宿していたことがわかるのみであり、鹿児島藩士は寄宿生と通学生がいたことが「手控」からうかがうことができる程度である。寮則が厳しかったと思われることについては先に述べた

通りである。

ただし留学生には「薩行書生ニ被下物」が規則で定められており、一日に玄米一升、「月雑用」として四石二歩が与えられていたその他、器械の買い上げ料や先生への挨拶などの手当として盆と暮れには二十匁が支給されていた。このような手当金について、藩士によつては返上していた者もいたようであるが、留学生たちがいつ、どこで、どのような場合にこれらの手当金を使用していたかは「手控」からうかがうことはできなかった。

#### (6) 留学生の出身藩の内訳と留学手続き

明治三年から四年にかけて、鹿児島藩に集まった諸藩からの留学生の出身は様々であるが、「手控」で確認することのできる名前は表の通りである。表には全三百十四名の名前をあげたが、作文の割り当てに出てきた氏名のうち「堀部」「仙波」「柏木」の名前は入っていない。また、鶴岡藩士も表に掲げた以外の藩士が鹿児島藩に留学していたことが判明している<sup>25</sup>。さらに「南遊日記」にある桑名藩留学生のうち高松範重の名前も見ることができない。留学生には「手控」記載以外の人々もいたと思われる。また、出身地を「不明」としたものの多くは鹿児島藩士、または支藩の人々だと思われるが、今後確認していく必要性があるだろう。

表には本当に留学生だったのかどうか不明の人物も入れている。例えば「霧島栄ノ尾温泉・安藤宗次郎」「国分浜ノ市問屋・林彦右



衛門」などである。また、江戸時代に武家伝奏を務めた広橋家の従者の名前が「手控」には記載されていた。彼等の名前がなぜここに書かれていたかも「手控」からは知ることができなかった。

もう一点挙げると、鶴岡藩以外にも旧大名家の人間が鹿児島藩に留学していたことがわかった。信州上田藩主侯子・松平弥三郎と弘の二人である。残念ながら弥三郎と弘が誰であるかはわからない。最後の上田藩主・松平忠礼はこの時二十歳、その子息が留学するほどの年齢に達しているとは考えにくい。しかもこの時期、忠礼は藩知事を務めている。弥三郎と弘が誰なのかは、今後、上田藩の史料から考えていきたいと思う。

出身地の内訳としては、鹿児島藩および支藩の人々を除くと、やはり鶴岡藩士が一番多い。次いで熊本藩、姫路藩出身者を多く見ることが出来る。また、鶴岡藩や姫路藩、桑名藩のように戊辰戦争の際に徳川についた藩の出身者も、彦根藩や与板藩のように新政府についた藩の出身者も留学生を出している。地域的に見れば福岡藩、熊本藩、中津藩のように九州の藩士が多いが、北は弘前藩士、北陸から大聖寺藩士などもあった。一方で鹿児島藩と並ぶ雄藩の一つ、山口藩は藩士を一人も出していない点も注目すべきであろう。この点についても今後、各出身の藩側の史料を見ていく必要がある。

左にあげた史料は樋口一蔵が「市立学校御役所」に向けて提出した願書である。おそらくこの史料から、彦根市立図書館は「手控」の筆者を樋口一蔵としたのではないかと思われる。また、受取の

「市立学校御役所」は鹿児島藩の御役所を指すと思われる。

私儀此度

御当藩ニ罷出、修行統度志願ニ付、大坂御藩邸ニ而兼而相願、御添書等も頂戴、陸行仕候処ニ而、鳥渡藩用向も有之ニ付、来ル五月頃ニ 帰藩可致様申越候間ニ而、暫時空敷滞在罷在候間ハ、残念ニ御座候間、翌月当御校江入寮仕度此段御願御届上候、

三月廿八日

樋口一蔵

市立学校御役所

ここでは彦根藩士が鹿児島藩での軍学修業を希望する際の手続きを知ることができる。鹿児島藩で行われる軍学修業に参加したい場合は、鹿児島藩大坂藩邸から添書を受け取るなど、大坂藩邸が窓口になっていることがわかる。もちろん九州の藩の場合は大坂藩邸が窓口になることはないだろうが、「手控」や「南遊日記」を見ていくと留学生たちは鹿児島へ訪れる際や鹿児島から帰藩する際に、大坂や長崎の藩邸に立ち寄っているところからも、大坂や長崎の藩邸が窓口になっていたことは十分に考えられる。

以上、「手控」から鹿児島における諸藩からの留学生の様子を見てきたが、次にこの鹿児島藩が行った軍学教育がなぜ、この時期に行われ、どのような意味を持っていたのかを考えてみる。とした

表1 「手控」にみる鹿児島藩への留学生出身藩内訳

出身・肩書	名 前	備 考	出身・肩書	名 前	備 考
出石藩	稲垣幾介		鹿児島藩	川上喜藤太	
上田藩	侯子・松平弘		鹿児島藩	川添彦右衛門	
上田藩	侯子・松平弥三郎		鹿児島藩	相良幸介	
上田藩	大島平四郎		鹿児島藩	増分尚次郎	
宇都宮藩	鶴牧分造		鹿児島藩	大山精一	
雲州藩	近藤脩之助		鹿児島藩	大野武七	
雲州藩	高木貫一		鹿児島藩	但馬仲介	
雲州藩	石田精之介		鹿児島藩	谷山平蔵	
大泉藩	永井深平		鹿児島藩	中村善之介	
大泉藩	加藤竹三郎		鹿児島藩	田原惣太郎	
大泉藩	黒崎与八郎		鹿児島藩	土持膳太夫	
大泉藩	今泉鉉一郎		鹿児島藩	藤田孝右衛門	
大泉藩	山口三弥		鹿児島藩	内田八郎次	
大泉藩	松井季治		鹿児島藩	日置吉左衛門	
大泉藩	神田六右衛門		鹿児島藩	梅北八郎右衛門	
大泉藩	石井武雄		鹿児島藩	白濱峯一	
大泉藩	石川与八郎		鹿児島藩	北條	
大泉藩	浅香彦右衛門		鹿児島藩	木腹休五郎	
大泉藩	伴音門		鹿児島藩	野元静一	
大垣藩	守屋竹蔵		鹿児島藩	野村清	
小浜藩	佐伯弘平	長崎にて面会	鹿児島藩	友野弥一	2月1日出立
小浜藩	柏屋懸太郎	長崎にて面会	鹿児島藩	築瀬新之丞	
鹿児島藩	伊地知甚左衛門		上山藩	中嶋泰平	
鹿児島藩	永田研吉		霧島栄ノ尾温泉	安藤宗次郎	
鹿児島藩	永田彦左衛門		熊本藩	遠藤喜三郎	2月下旬出立
鹿児島藩	岡村休左衛門		熊本藩	遠藤喜太郎	
鹿児島藩	岡田敬介		熊本藩	坂本次郎	
鹿児島藩	下ノ新田・得能左平次		熊本藩	松嶋繁三郎	
鹿児島藩	下ノ新田・榎木新之丞		熊本藩	瀬嶋嘉平	
鹿児島藩	河野甚五郎		熊本藩	大西弥太郎	
鹿児島藩	河野保次郎		熊本藩	池崎吉十郎	
鹿児島藩	貫代幸之進		久留米藩	水野丹後	2月1日出立
鹿児島藩	串木野・金丸謙吉		久留米藩	赤松	2月1日出立
鹿児島藩	向井省吾		桑名藩	小野二郎	
鹿児島藩	国分才二		桑名藩	水野太郎	
鹿児島藩	黒川豊輔		桑名藩	中邑鉄二	
鹿児島藩	黒木源之介		桑名藩	馬場榊三郎	
鹿児島藩	坂元虎		国分浜ノ市問屋	林彦右衛門	
鹿児島藩	坂元俊一郎		佐賀藩	藤原九郎	
鹿児島藩	坂元彦右衛門		佐賀藩	徳久儀平	
鹿児島藩	坂口繁輔	通塾	佐賀藩	平川判治	
鹿児島藩	三輪幸之介		笹山藩	法貴篤介	
鹿児島藩	市来・岩重格之丞		重原藩	豊田善八郎	
鹿児島藩	児玉八之進		静岡藩	阿部階	長崎にて面会
鹿児島藩	芝山四郎兵衛		静岡藩	志村太郎	2月1日出立
鹿児島藩	種々島・岩門八三		静岡藩	小川次郎	2月1日出立
鹿児島藩	松岡五右衛門		静岡藩	小林弥太郎	
鹿児島藩	松崎鉄次	2月1日出立	静岡藩	吹田鯛次	
鹿児島藩	上ノ原・黒田金弥		静岡藩	塚原直太郎	2月1日出立
鹿児島藩	新納七次		静岡藩	堀覚之介	
鹿児島藩	新納平兵衛		新発田藩	上田澄之助	
鹿児島藩	星山彦之進		島原藩	宮川大弥太	3月20日退寮
鹿児島藩	青山甚之丞		島原藩	笹田安右衛門	
鹿児島藩	青木黒人		島原藩	山本佐学	3月20日退寮

出身・肩書	名 前	備 考	出身・肩書	名 前	備 考
島原藩	澤省吾		与板藩	河向藤太	2月1日出立
大聖寺藩	梶谷克彦	兵庫にて面会	与板藩	内藤祐太	2月1日出立
大聖寺藩	山口均	兵庫にて面会	与板藩	畑米一郎	2月1日出立
津山藩	後藤吾郎		不明	伊集院新右衛門	
津山藩	渡辺敷五郎		不明	伊集院早五郎	
土州藩	安岡通之助	2月1日出立	不明	伊地知七右衛門	
豊津藩	碓井徳川太郎		不明	伊地知甚右衛門	
豊津藩	遠藤鉄之助		不明	伊地知清左衛門	
豊津藩	熊谷俊一郎		不明	河上次郎兵衛	
中津藩	猪渡半三郎		不明	貴嶋美助	
中津藩	恩田源五郎		不明	菊野弁之助	
中津藩	角半右衛門		不明	橋口直右衛門	
中津藩	菅沼新吾		不明	玉利善之丞	
中津藩	堀輝吉		不明	原田孫兵衛	通塾
中津藩	澤渡彦五郎		不明	溝口新次郎	
中津藩	濱野牛児		不明	今村米輔	
中村藩	岡田五郎		不明	坂本十郎	通塾
中村藩	池田参蔵	長崎にて面会	不明	三原菊五郎	
中村藩	門馬亮三		不明	三原彦五郎	通塾
彦根藩	廻沢之丞		不明	市河嘉衛	通塾
彦根藩	宮内善之進		不明	市来菊之丞	
彦根藩	相馬信一郎	4月14日出立	不明	市来真助	
彦根藩	樋口一蔵	4月14日出立	不明	児玉八郎	
肥前鹿嶋藩	下川辺百一		不明	児玉友介	
肥前鹿嶋藩	谷口又四郎		不明	児上友介	通塾
姫路藩	伊藤潜蔵	2月1日出立	不明	小倉喜八郎	
姫路藩	永田富太郎	2月1日出立	不明	小倉基彦	
姫路藩	河合猪之吉	2月1日出立	不明	松本光七	
姫路藩	岩橋静彦	2月1日出立	不明	松本平輔	
姫路藩	久松数馬	2月1日出立	不明	上村四郎次	
姫路藩	牛込秀	2月1日出立	不明	新納雄吉	
姫路藩	高須鏗一郎	2月1日出立	不明	水野太郎	
姫路藩	根峯来四	2月1日出立	不明	西謙蔵	
姫路藩	生駒新平	2月1日出立	不明	西謙蔵	通塾
姫路藩	大橋信夫	2月1日出立	不明	西石八郎	
姫路藩	池内習（吉）	2月1日出立	不明	千田長之進	
姫路藩	塚原秀雄	2月1日出立	不明	相野太兵衛	
姫路藩	本宮平吉		不明	村上沢之丞	通塾
姫路藩	本宮平馬	2月1日出立	不明	村田鯛太郎	通塾
平戸藩	鈴木鍵之助		不明	大迫喜兵衛	
弘前藩	菊池九郎		不明	知識深介	
弘前藩	菊池九郎		不明	竹下宇兵衛	通塾
弘前藩	田中坤	4月21日出立	不明	竹下丈八郎	
弘前藩	樋口小三郎	4月14日出立	不明	中村龍助	
広橋正三位殿従者	永田忠俊		不明	中嶋敬介	通塾
福江藩	中里力三郎		不明	長友善介	
福岡藩	安中定		不明	田原惣太郎	
福岡藩	津田守彦		不明	二木漂之進	
松嶺藩	川上十郎		不明	柏田素助	
松嶺藩	塚田道弥		不明	福永吉之助	
三日月藩	田嶋源太郎	2月1日出立	不明	平田助次郎	
三日月藩	田嶋源太郎		不明	木原尚兵衛	
水戸藩	鈴木陸之介		不明	和仁半十郎	

※藩名は「手控」の表記のとおり

## 6. 鹿児島藩における軍学教育の位置づけ

明治政府が近代的な軍隊制度を目指して徴兵令を制定したのは明治六年（一八七三）のことである。これにより満十七才〜四十才までの男子はすべて国民軍に登録させられた。建前上は国民皆兵という体制になり、ここによりやく政府による軍隊がつくられたのである。

では本稿で取り上げた明治六年以前はどうであったのだろうか。明治元年閏四月には早くも諸藩に対して一万石につき十人の兵員を差し出すことを政府は命じている。この徴兵について古屋氏は「中央政府の直属軍隊をつくるというよりも、戊辰戦争のさなかにあって、中央政府から藩に対する軍事指令権を確立することにあつた」<sup>26</sup>としており、彼等は翌二年二月に東北の平定などの理由により各藩へ戻されている。つまり、本稿で取り上げた明治三年から四年にかけてのこの時期、政府は直属の軍隊を持っていなかった。

明治初年、政府軍の創設については二つの構想があり、明治二年六月に政府の兵制会議において、大村益次郎と大久保利通との間で、兵制論争と呼ばれる激論がなされたことは良く知られている。大久保はこれまで諸藩、特に鹿児島藩、山口藩、高知藩が保有していた兵力を用いて国防にあたらせるという構想、一方、大村は藩兵に依拠せず、広く一般の人々を対象とした政府直属の軍隊を新たに創設するという構想である。

この論争について簡単に紹介しておくと、兵制会議は明治二年六

月二十一日から二十五日にかけて開催された。六月二十一日段階での論点は、当時京都 駐留していた鹿児島・山口・高知藩兵の取

扱いをめぐるものであった。大村を支持する木戸孝允も論争に加わり彼を援護したが、二十三日、大久保の主張に沿った形で京都駐留の三藩兵（鹿児島・山口・高知）が「御召」として東下することが決定され、この問題については大久保派の主張が通ることになった。また二十三日の会議では、先の陸軍編制法の立案者であり、大久保の右腕ともいえる吉井友実も議論に加わり今後 ついての議論も始まった。ここでも大久保・吉井らの主張する「藩兵論」と大村や木戸が主張する「農兵論（一般徴兵論）」が激しく衝突し、議論は翌日も続いた。しかし会議の結果、兵制問題は後日改めて議論することとされ、大村の建軍プランの事実上の凍結が決定され、この日、二十五日まで続く兵制論争がほぼ決着した。とはいえ大村の構想の一部は大阪兵学寮などに受け継がれていくのである。<sup>27</sup>

洋式軍隊創設のため、軍学・実務教育を専門的に行う場として兵学校を設立しようとする動きは新政府樹立後すぐに見ることができ、設立の古い順に政府が解説した兵学校を簡単に見ていくと、戊辰戦争における東北・越後戦争が激化していた慶応四年七月、新政府による最初の「兵学校」が京都につくられている。翌二年九月に同校を廃校し、大阪兵学寮を創設した。翌年四月、京都の仏式伝習所の伝習生を大阪兵学寮に入れ、これを教導隊とし、同年五月、横浜語学研究所を大阪兵学寮の管轄に入れ、これを幼年学舎とした。

そして戊辰戦争の戦功章典も終わり、ある程度落ち着き始めた明治二年十一月に大阪兵学寮は陸軍兵学寮と改称され、東京には海軍操練所が創設された。ここではじめて兵学校は陸軍と海軍に分かれ、それぞれが兵学校を設立したのである。つまり、鹿児島においても軍学教育が行われていた時期は、政府にとっていかに軍事力育成に力を入れて始めていた時期であったかがよくわかるだろう。中でも大阪兵学寮の設立、運営には大村の考えがかなり反映されているという。

鹿児島藩士も多く入学していた海軍操練所の様子を簡単に紹介しておくと、明治二年九月十八日、明治政府は海軍操練所<sup>28</sup>を築地に創設し、同年十一月二十七日に授業が開始された。授業開始に先立ち、諸藩に次のような布達を出し、練習生を募っている。

今般、海軍操練所御取立に付、拾八歳より廿歳迄、大藩者五人、中藩者四人（小藩三人）宛、稽古修行之為め可差出候事

但、食事者自分より持出可申事、尤出精上達之上者等級に応し、食用月給等可被差出事

九月十八日

兵部省

鹿児島藩

広島藩

福岡藩

和歌山藩

金沢藩

熊本藩

山口藩

高知藩

久留米藩

佐賀藩

徳島藩

水戸藩

福井藩

柳川藩<sup>29</sup>

ここでは藩から十八歳より二十歳までの人間を藩の規模により人数制限はあるにせよ、政府の学校に差し出すように達している。その後、翌三年正月に始業式が行われ、二月には練習用蒸気船が与えられるなど着々と整備がなされていた。

その教育内容を見ると「海軍兵学寮規則及内則」<sup>30</sup>には予科では英学、漢学、数学、馬術、体術、水泳を二年間学び、試験に合格した後、本科に進む。本科では英学、航海学、砲術、造船学、蒸気機関学、兵学、軍律、化学大略、海上諸規則、医学を三年かけて学ぶという非常に本格的なものであったことがわかる。

明治三年十一月には改編が行われ、鹿児島藩士・川村純義が兵学頭を兼任し、これまでの通学生百余名を廃し、在寮生徒七十余名の中から幼年生徒十五名<sup>31</sup>、生徒二十七名を選抜し、これまで生徒から授業料を取っていたが、すべて官費で賄うことにしたのである。政府の力の入れようが、このことからよくわかる。

海軍兵学寮の学生の出身地については明治三年時のものを見ると、鹿児島、山口、土佐、金沢、徳島など大藩の藩士を多く見ることができる。この時の退寮生徒のなかには先に挙げた田尻稻次郎をはじめとした鹿児島藩士も多い<sup>32</sup>。また、鶴岡藩のように鹿児島藩への留学生、留学前か、留学後はわからないが、海軍兵学寮にも入学しているように、鹿児島藩へも留学生を出し、海軍兵学寮にも入学者を出している藩がある一方、海軍兵学寮のみに藩士を出している藩もある。この点については今後、その内訳についての詳細な検討が

必要であろう。

相馬永胤をはじめ、多くの諸藩が鹿児島において軍学修業を行っていたこの時期、明治政府も相次いで兵学校を開設し、各藩から多くの学生が集まっていたことは今、述べた通りである。一方、ここまで「手控」で確認した通り、鹿児島藩への各藩からの留学生の人数も、政府が設立した兵学校に通う学生たちと何ら遜色ない数であり、日本国内で本格的に軍学を学ぶ機関として、鹿児島藩の兵学校には、政府開設した兵学校に負けず劣らずの学生が集まり、諸藩士に対して軍学および技術教育がなされていた。その教育内容も実際に戊辰戦争に従事した人間が教えていたことから考えても、政府の兵学校に劣るものでもなかったと思われる。

では、鹿児島藩がなぜこれほど多くの諸藩士を鹿児島に集めて、軍学教育を行っていたのであろうか。現在、それを明確に知ることができる史料は見あたらないが、この点についても今後の課題となるが、この時期の兵制論争や、その後の大村益次郎の軍隊構想を受け継いだ形での兵学校の相次ぐ設立といった政府の動向を考えると、鹿児島藩が行った諸藩士に対する軍学教育は当時、鹿児島藩側が主張していた藩兵を中心とした中央政府の軍隊づくりのためと考えることができるだろうか。つまり各藩に対して軍隊教育を行うことによって、強力な藩の洋式軍隊をつくり上げ、それを以て中央政府の軍隊に宛てていくという大久保を含めた鹿児島藩側の構想の一環として、この時期、鹿児島藩において軍学教育が行われていたと

筆者は現在のところ考えている。

一方、大村が構想した藩兵に依拠しない形で政府直属軍隊の創設は陸軍・海軍の創設、そして官立の陸軍兵学校や海軍兵学校における軍学教育に繋がっていく。鹿児島藩の軍学教育に山口藩士が一人も参加していないということも、この点から考えると興味深い点であろう。

このように明治初年から徴兵制が取られる明治四年というこの期間に対立する二つの軍隊構想の中にこの鹿児島藩の軍学教育を位置づけることができると思われる。

おわりに

ここまで、長々と明治初期における軍学教育について述べてきた。最後にこれまでのまとめと今後の課題についてを述べて本稿を終えたいと思う。

まず、本稿が取り上げた明治三十四年という時期に、軍学を本格的に学ぶ場として政府によって創設された兵学校のほか鹿児島藩の兵学校があったことを確認できた。特に鹿児島藩への留学はこれまで、鶴岡藩の鶴のみが知られていたが、そうではなく、全国の各藩から実に多くの人々が訪れていたことを知ることができた。

では、この時期に鹿児島藩がなぜ、このような軍学教育を行っていたのかという問題に対しては、鹿児島藩は幕末以来、積極的に西洋式軍制を取り入れ、質・量において他藩を圧倒しており、諸藩も

それを見習うべく留学生を派遣したというように捉えることができる。また、「相馬永胤翁懷旧記」にあるように鹿児島藩の状況を観察するために藩士を派遣したということも考えられる。実際にこれまで、鶴岡藩の鹿児島藩への藩士派遣はどのように考えられてきたように思う。

しかしながら、本稿で明らかにしたように、この時期は、鶴岡藩だけでなく、全国の各藩から藩士が派遣されていた。その数は鶴岡藩の七十余名を筆頭に、多い時期は百人を超えていたと思われる。この数は明治政府による軍学教育機関である海軍兵学校に集まった生徒数とほとんど変わらない数である。これは藩士を派遣した各藩にもその藩なりの目的があったと思われるが、鹿児島藩が各藩士に対して軍学教育を行うという積極的な関与の結果、これほど多くの留学生が集まったと考えるべきではないかというのが筆者の現在の考えである。そして、それは徴兵制にいたる様々な過程のなかに位置づけるべきではないかと考えている。

本稿で取り上げた、このような鹿児島藩の軍学教育という事例紹介により多くの問題、課題を考えることができるだろう。一番大きな課題としては、これほど大人数を集めて軍学教育を行った鹿児島藩側からこの問題を取り上げる必要があるだろう。あくまでも筆者の管見の限りに過ぎないが、鹿児島藩の史料にはこの軍学教育に関するものを見ることが出来なかった。『西郷隆盛全集』にも鶴岡藩に関するものは見ることができたが、この時期、他藩が来ていた

ことには触れていない。大久保についても同様であるが、「手控」を見る限り、非常に多くの鹿児島藩士が関わっている。藩政史料は当然のことながら、彼等を追うことによって鹿児島藩から見た軍学教育を見ることが出来るかも知れないと考えている。

さらに、鹿児島藩に留学した藩が、その当時、藩内においてどのような立場の人間であったのか、また、藩に帰った後、この留学の成果がどのような形で活かされていたのかを考える必要があるだろう。徴兵制が採用された後、建前としては各藩の軍隊はなくなってしまう。そのような中、彼等は持ち帰った知識などを活かす場があったのだろうか。これは各藩を詳しく見ていく必要があるだろう。この問題を考える上で興味深い記述を「相馬永胤翁懷旧記」に見ることができる。

明治十年（一八七七）ノ、西南ノ騒動ハ、余カ「ニウヘブン」滞在中ニ起リタルモノニテ、薩摩人以外ニテ此騒動ニ加リタルモノハ、旧佐賀藩ノ石井竹之助、徳久某、旧熊本藩ノ池部吉十郎、其他多クハ、余カ先年鹿児島滞在中最モ親數交際シテ政治上ノ事ニ付テハ、余ト意見ノ同一ナリシ者ナリ。又余ノ同藩人ニシテ親友ナル大東義徹、大海原尚義氏等モ、此際入獄セラレタルコトアリテ、若シ余モ当時日本ニ在リタレハ、或ハ西郷党ト共ニ城山ニ最後ヲ遂ケタルヤモ知レスト思ヒシコトアリ。<sup>32</sup>これは当時、アメリカ・イェール大学に留学中であつた相馬が、彼地において聞いた「西南戦争」に対する感想である。ここでは

「西南戦争」において鹿児島軍側に立って、戦った鹿児島藩および他藩の人々の多くは相馬が鹿児島滞在中に知り合った人々であり、自分がもし、この時、日本にいたならば西郷と行動を共にして明治政府と戦い、城山において自害したであろうということが記されている。それほど相馬にとって鹿児島へ留学したほんのわずかな数ヶ月の時期の経験が大きかったことを物語っていると、この時期の鹿児島藩が行った軍学教育の影響が西南戦争にまで及んでいたことを示唆している。これも今後の課題の一つとして考えていきたいと思う。

このように本稿では多くの、そして大きな課題を残したが、最後に専修大学に関わる問題を取り上げて、本稿を終えることとする。本学創立者の一人・相馬永胤は藩命を受け、鹿児島藩へ留学した。ここで軍学を学び、その後、藩命を受けアメリカへ留学する。この鹿児島藩留学時代の相馬の動向の一端を本稿では明らかにすることができた。

幼少 ころから軍人を志した相馬は鹿児島藩に留学する以前は、大阪兵学寮の入学試験を受けたが、身体検査で不合格となる。また、アメリカ留学後はウエストポイントの陸軍士官学校を志望するも、当時は外国人を受け入れていなかったため、断念する。つまり、相馬が本格的な軍学教育を受けたのは、後にも先にもこの鹿児島藩留学時のみということになる。この経験が相馬の生涯のなかで、どのような意味を持ったのかという点については、これもまた今後の課

題となるが、この時期に多くの藩の人々、そして鹿児島藩の重臣たちに直接会って、様々な話を聞くことができたことは相馬のみならず、この時期、鹿児島藩に集まった多くの人々にとって非常に有意義なものであったと思われる。

## 註

1 「相馬永胤翁懷旧記」(「相馬家文書116」専修大学大学史資料課蔵)。この史料は相馬永胤が晩年に書いた自叙伝であり、平成9年に専修大学年史資料室より『相馬永胤翁懷旧記 翻刻版』として翻刻版も刊行されている。

2 「手控」(『郷土資料目録 第一集』軍事16 彦根市立図書館)

3 樋口一蔵に関する来歴や掲載史料の内容についてはすべて、彦根城博物館学芸員・野田浩子氏のご教示によるものである。改めて感謝する次第である。

4 三宅紹宣編『幕末維新論集4 幕末の変動と諸藩』

(吉川弘文館 二〇〇一)を参照

5 幕府による海軍の教育機関としては、この神戸の海軍操練所以前にも安政二年(一八五五)、長崎に設けられた「海軍伝習所」(安政五年に閉鎖)、その後、安政四年(一八五七)、築地講武所内に設けられた「軍艦操練所」があり、神戸の海軍操練所が最初ではないが、西国諸藩の藩士のみを対象としたものとしてはこの海軍操練所が最初と言えよう。



- 6 『薩藩海軍史 中巻』(原書房 一九六八) p807
- 7 『薩藩海軍史 中巻』(原書房 一九六八) p809
- 8 『北雷田尻先生伝記 上巻』

(田尻先生伝記及遺稿編纂会 一九三三) p18

- 9 『薩藩海軍史 中巻』(原書房 一九六八) p811
- 10 鶴岡藩は庄内藩と称されることの方が多いが、ここでは正式名の鶴岡藩とした。また、鶴岡藩はこの時期、大泉藩と改称しているが、わかりにくいので、ここでは鶴岡藩のままにした。

- 11 『鹿児島県史 第三巻』(鹿児島県 一九四一) p577
- 12 山田済斎編『西郷南洲翁遺訓』(岩波書店 一九二九)
- 13 鳥海良邦『南洲翁遺訓集 並翁と庄内藩』

(行地社出版部 一九二七) p15

- 14 『西郷隆盛全集 第三巻』(大和書房 一九七八) p64
- 15 『西郷隆盛全集 第三巻』(大和書房 一九七八) p66
- 16 『西郷隆盛全集 第三巻』(大和書房 一九七八) p608
- 17 山田尚二「庄内藩主・藩士の来鹿と遺訓の頒布」

(『敬天愛人』第二十号 二〇〇一)

- 18 『西郷隆盛全集 第三巻』(大和書房 一九七八) p170
- 19 鳥海良邦『前掲書』p19
- 20 鳥海良邦『前掲書』p18

- 21 瀧安良の事績については町田成男編『桑名藩士 瀧安良記念帳』(一九三三)に拠る。「南遊日記」もこの書籍に収録されている。

- 22 柳生悦子『史話まぼろしの陸軍兵学寮』

(六興出版 一九八三) p71

- 23 倉沢剛『幕末教育史の研究三―諸藩の教育政策―』

(吉川弘文館 一九八六) p101

- 24 『鹿児島県教育史』(鹿児島県教育委員会 一九六一) p234
- 25 鳥海良邦『前掲書』p15～19
- 26 古屋哲夫「近代日本における徴兵制度の形成課程」

(『人文学報』四十七号 一九九〇)

- 27 千田稔『維新政権の直属軍隊』(開明書院 一九七八) 参照
- 28 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』(原書房 一九六八 大正八年刊の復刻本)には、当初、名称については「兵学寮」または「海軍操練所」など一定していなかったが、明治三年十一月五日に「海軍兵学寮」と定められたとある。

- 29 『薩藩海軍史 下巻』p1001

- 30 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』所収

- 31 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』p7～12

- 32 「相馬永胤翁懷旧記」(前掲)